

12/18 記者会見

1. 内容（資料説明）

①子ども向けのアンケートで大型遊具デザインが決定

子育て世帯や子どもたちから「遊び場の充実」や「遊具等がある公園」を求める声が多く寄せられたことに伴い、令和8年度に道の駅パティオにいがたへ大型遊具の設置に向けた検討を行っている。最終的なデザインを選定するため、市内小学生および園児に対するアンケート調査を実施し、今回、投票結果がまとまり遊具デザインが決定した。4種類のデザインの中で、「シンボルツリー」に決定。投票数は、記載の通り。特徴は、風やニット、ミッケなど見附ならではのものが集まる遊び場。遊具の数は58種類で、夏場対策も含めた熱くなりにくい素材。インクルーシブ、障がいのある子どもと一緒に遊べることに配慮した遊具となっている。今後は、このデザイン案を基に詳細な検討を行っていく。3月議会の承認を経て来年度事業として進める準備をしているところ。

②【移住施策の実績報告】現地ツアー参加者数が前年比10倍

昨年度、見附市では見附市移住促進のための戦略を策定し、移住のPRを市だけでなく、市民や団体などと一体となって取り組みを進めている。その結果、今年度は昨年度と比較して、相談件数は約3倍、現地ツアー参加人数は約10倍に増加。令和7年度に開始した移住施策の概要は資料の通り。つながり移住支援金は、市民の移住を紹介した人にも10万円を交付する制度。問い合わせは4件あり、実際に移住につながった実績がある。これは、市の取り組んでいる30歳の同窓会がきっかけとなっている。さまざまな移住施策が実績につながっている。また、移住アンバサダーは、3団体1個人を認定。現地ツアーに協力していただき、見附の魅力や自身の体験談を語っていただいている。私自身も、利用者からお話を聞いたが、見附の魅力を感じていただいていることがわかった。お試し移住住宅については、利用者の9割はテレワーカーであり、私が話を聞いた人は、東京と行き来したいという人だった。見附の良さを感じていただいたが、その後のフォローが大事になってくると感じた。補助金シミュレーターは、補助金がどのくらい出るかななどを参考にさせていただくシステム。

これらの成果がどうかは、表にある通り。相談件数が昨年同時期に比べて、3倍以上に増えている。移住件数については、世帯数は増えているが人数は現状維持。相談者数が増えた要因は、記載の通りだが、新規事業を展開していることが一番かと。その中でもお試し移住住宅を利用したところが多い。アクセスの良さなどを感じて興味を持ってもらっている。つながり移住支援金も、移住につながったので効果があったと思う。もっと発信力を高めなければと思っている。また、気になる点では、一戸建ての賃貸住宅が少ない、雪の問題、首都圏へのアクセス。しかし、きっかけ作りとして相談件数が増えていることは、非常にいい状況になってきている。そこから移住に繋げるためにどうしていったらいいか、継続的な管理、フォローなどを含めて課題解決に向けて取

り組んでいきたい。体制の充実を図っていかなければと思う。

③市民みんなで創る「誰もが安心して暮らせるまちみつけ」を目指して

地域共生社会のための啓発講演会を開催

「地域共生社会」とは、高齢になっても、障がいがあっても、誰もが役割を持ち、互いに支え合い、いきいきと暮らしていける社会。今年4月に策定した「見附市障がいを理由とする差別のないだれもが共に暮らせるまちづくり条例（略称：差別のない共生条例）」も、この地域共生社会の実現を目指すことを目的としたものであり、誰ひとり取り残さない地域を実現するためにも、市民一人ひとりの更なる理解と協力が必要。

そこで、この度、講師をお迎えして、地域共生社会への理解を深め、今後の地域づくりに活かすことを目的として講演会を開催。福祉関係者だけでなく、コミュニティを構成するすべての市民のみなさんに参加を呼び掛けている。

2. 質疑応答

質：新潟日報

- ・大型遊具について、工事の実施が令和8年の予定とあるが、目標としていつぐらいまでに完成させたいのか。

答：市長

- ・詳しい時期については、調整してお知らせしたい。金額についても積算して、資金額は1億円規模となっているが、具体的な工程を詰めていきたい。本当は暖かいうちにオープンできればいいと思うが、判明次第お知らせできれば。令和8年度中には完成させたいと思っている。

質：新潟日報

- ・指定管理も変わり遊具もできて、何か連携したり、合わせてイベントをしたりなど想定していることはあるか。

答：市長

- ・指定管理者は12月議会で決定したばかりで、今後連携をとって、遊具を活用したイベントも含めて、指定管理者にも頑張ってもらいたいと思う。指定管理者自体、大きく変わるので、しっかりと運営していただいて魅力ある施設にさせていただく。その中で遊具ができた後については、連携も含めて、市としてもフォローしていく必要がある。

質：新潟日報

- ・今回のアンケートは子どもたちを中心ということだったが、遊具に関して保護者から意見はあったか。

答：建設課長

- ・保護者から遊具について、直接問い合わせや、こういう遊具がいいというご意見などは特に上がってきてない。

答：市長

- ・私も直接は聞いてない。12月議会で議員から、こういう意見があったということはお指摘いただいた。疑問に思うところについては、丁寧にご説明していければと思う。

質：新潟日報

・3月議会でこの案を諮るのか。

答：市長

・はい。来年度予算案の中でご審議いただいて、ご承認いただければ、実施する。

質：読売新聞

・案の中で、小学生からシンボルツリーデザイン案が好評だったが、好評だった理由や、子どもたちにどこが刺さったのかわかるか。

答：建設課長

・アンケートまでは特に取っていなかったが、推測すると遊具の数が多かった部分と、小学生は体を動かすような遊具が好みだったのかということで、シンボルツリーは滑車でロープウェイみたいなものがあるところが要因と推測している。はっきりした意見として、得票数が集中して高かった要因というところは、明確にはアンケート結果としては上がってきてない。

答：市長

・今回アンケートの中で項目があればよかったのかもしれないが、とりあえず選ぶということでさせていただいた。あとは保育園で先生が説明しながらやっているの、その中で感触を掴んでいる部分もあると思う。もしわかればお知らせする。

質：読売新聞

・障がいのある子どもも一緒に遊べることに配慮しているとあるが、具体的にはどういったところが配慮になるのか。

答：建設課長

・別紙のとおり、シンボルツリーの中央部分の正面がインクルーシブ遊具という障がいのある方でも、障がいのない方でも、すべての方に使っていただけるような遊具というエリアがある。そういう形で設置するデザインとなっている。

質：読売新聞

・インクルーシブ遊具というのは、怪我をしにくいとか、どういった遊具になっているのか。

答：建設課長

・別紙の下段の表のところで、「みんなが遊べる遊具」という形で表現されているが、回って遊ぶ遊具、揺れるっていう形、例えば、インクルーシブ遊具のブランコだとベンチシートのような、お尻が収まる、不安定な体勢でも遊べるようなもの。

答：市長

・身体に障がいをお持ちの方でも使いやすい施設になっている。

答：建設課長

・パーツがすべて、身体の不自由な方でも楽しんでいただけるような遊具になっている。

質：見附新聞

・工事の発注方法については、随契になるのか、入札になるのか。

答：市長

・発注については随契ではない。このデザインを使う、設備についてはここを使うという前提であり、実際に工事をするのは建設会社になるので、随契という形にはならない。

質：見附新聞

- ・工期がどのぐらいかかるかにもよるが、さっき市長がおっしゃったように暖かいうちというのであれば、予算が通れば入札は早期という理解でいいか。

答：市長

- ・今から準備を進めておいて、できるだけ速やかに着手できるようにしていきたい。

質：新潟日報

- ・お試し移住について、利用者が多いが、なかなか移住に繋がった実績がないというところで、利用者の方へのフォロー、利用後の繋がりは何か対応されているのか。

答：地域経済課長

- ・フォローはしなきゃいけないということで、準備はしているが、具体的にはメールのやり取りをするとか、その程度しかやっていない。今年の5月にスタートし、試していただいて、最後に出られるときにはヒアリングをさせていただいて、半年経ったという状況なので、これからきちんとフォローしていくことが必要と思う。

答：市長

- ・そこが課題だと思っていて、しっかりと対応を強化して移住に少しでも繋げていくというところが大事。相談に来るようになったことは進歩していると思う。

質：新潟日報

- ・お試し移住中に移住アンバサダーの方との交流も積極的に行っているのか。

答：市長

- ・市職員もやっているし、アンバサダーの方にも一緒に入って説明していただいている。

答：地域経済課長

- ・お試しで来られる方の希望を聞いて、「私は農業に興味があって、そこを深く知りたい」とか、「学校のことを知りたい」とか、いろんな方がいらっしゃるわけだが、そういう方に応じて、アンバサダーの方からそういうところに強い分野の方に協力してもらっている。

質：読売新聞

- ・お試し移住の利用者7割が関東在住だが、相談件数22件のうち、どこの地域が多いか。

答：地域経済課長

- ・今はわからないので、後ほど回答する。

質：新潟日報

- ・議会の中で、市長は2期目で取り組んでいく政策についてお話された中で、見附駅東西自由通路を断念したが、影響がないように計画を見直していきたいといった中で、行き来しやすくなるというのが一つ課題だと思う。それをフォローするような具体的な考えはあるのか。例えば、地下道を整備するとか、足の不自由な方でも行き来しやすくするとか。

答：市長

- ・自由通路については、残念ながら断念させていただいたが、元々全く通路がないわけじゃなくて、一応地下道というものがある。そこをいかに円滑に移動できるかということは、価格面も含めて、どこまでできるかわからないが検討はしたい。あとは、西口側広場を整備することによって、もっと西口側を使おうと、少し分散して向こう側から来ていただく方も出てくる。駅舎については、JRの持ち物なので、どうするかも含めてJRと協議を開始している。費用分担

等も含めて、本当にやれるかどうかも含めて。駅舎もあまり大きなコストをかけない中で市民の玄関口となる駅が良いものになるように。西口広場、地下道、駅舎の部分この三つ。検討して早めに方向性をお示しできれば。

質：新潟日報

- ・公共交通の関連で、タクシー事業者とやるのが難しそうだという話があったが、それに代わる代替案、地域交通のあり方として何か考えはあるか。

答：市長

- ・市がほとんどお金を出すという提案をした中で、年末年始の運行をしていただけなかったのは本当に残念。お金ではなくて人の問題だった。昨年やった方式であってもできないということで、状況が変わったということ。それだけタクシー業界の人手不足が深刻なのかなということとを改めて思い知らされた。頑張っていたきたいという思いがあるので、どういったところを支援すれば、どういった形であればタクシーとして運転手が確保できるのかという議論もしながら、また別の手も、市民の皆さんに運転していただくのか、コミュニティワゴンもある。それから、民間の事業者が乗り出す可能性とか、あくまで想像の世界だが、国土交通省もだいぶ規制緩和をしているし、そういった状況を見ながら、夜間の足をどう確保できるかを考えていきたい。ついでに言えば、これから学校を再編していく中で、再編したところの子どもたちの足をどうしていくのかという部分がある。そのあり方についても公共交通、スクールバス、市民の皆さんの運転、地域の方の協力もあるかもしれない。さまざまな手段でいかに確保できるか。これは通学者だけじゃなくて、様々な方の足の確保についてしっかり検討していきたい。いずれにしても移動手段のあり方は大事にして考えたい。

質：見附新聞

- ・市内には 2 種の免許をお持ちになって、タクシーとかバス会社には属せずに市外の代行業者で仕事をしている方が複数いると聞いた。例えば、年末年始の時期に限定でいいが、市が直接雇用して、短期になると思うが、それだったらやるという人もいる。市長はどうお考えか。

答：市長

- ・究極的にはあり得ると思うが、タクシー会社も大事にしていきたい。撤退してしまうと完全にタクシー会社が見附市からいなくなることを受け入れなきゃならない。そんな中でタクシー会社との相談をしながら、でもやれないということになれば、今のような手段も選択肢の一つとしてはあり得る。

質：新潟日報

- ・各自治体でおこめ券をどうするかという問題がある中で、見附市としては、おこめ券にするのか、他の対応をされるのか、今の段階で決まっていることはあるか。

答：市長

- ・国の物価高騰対策で地方への交付金が決まったので、今検討を開始したところ。生活者支援という観点、事業者への支援、さまざまな声を聞きながら、速やかに決めていきたい。おこめ券は考えていない。さまざまな課題がある中で、米だけにしか使えないというのは。見附でも農家さんから直接もらえる人たちも多い。そういうことを踏まえて、検討していきたい。

質：見附新聞

- ・追加議案で、子どもへの 2 万円給付のところの質問で出ていたが、ここで求められるのはスピード感。3 月議会まで待っていたらという気がする。状況によっては専決という話も出ていたかと思うが、スピード感ということについて市長のお考えをお聞きしたい。

答：市長

- ・私自身も 3 月議会の 3 月補正では遅いと思っていて、より早く議会のご理解を得るような形で調整を進めていければと思う。

質：見附新聞

- ・12 月議会の質疑の中からケアプラザについて、市長は答弁の中で、「限界」という言葉を使っていたことが強く印象に残っている。「限界」という表現を使った意味を改めてお聞きしたい。

答：市長

- ・さまざまな赤字削減努力をしているが、今の仕組み上、体制上、その範囲内でやる対策としては、これ以上赤字を減らしていくことは限界という意味で使った。

質：見附新聞

- ・現在一般会計からの持ち出しについては、市立病院とケアプラザが病院事業会計で一緒になっているわけで、一般会計からの補助金いわゆる赤字補填という分については、1 億円を上限という形でできているが、次の介護計画が令和 9 年度からということで、そこまでに何かしらの見直しをするというようなことを示されているが、令和 7 年度と令和 8 年度については、現在の 1 億を上限とする方針は変わりないと理解していいか。

答：市長

- ・現段階では方針変更はない。ただ背に腹は代えられないような状況が出てきたときは別。

質：見附新聞

- ・市立病院に関して毎年決算推移を細かく見ているが、ここ数年の推移を見ると、コロナ禍の令和 2 年度は特別な事情だったが、令和 3 年の 5 月に新病棟が開設して、数字を見ると、そこが節目になってケアプラザの赤字が増えていっている。ここ数年、病院部門とケアプラザ部門に同じ割合で補助金を入れた形にして推移がわかるような集計をされている。市立病院部門に関しては、この 3 年は一般会計からの補助金を入れずとも 3 年連続黒字というのは病院関係者の大変なご苦労だとするところだが、市立病院の地域包括ケア病床、長岡 3 病院からの受け入れなどで中越医療圏の中では大事なポジションとして認められている。でも、それは在宅復帰に向けた一つの意味合いがあるわけで、ケアプラザはベースとしては在宅復帰医療と介護という点で在宅復帰に向けたもの。地域包括ケア病床が 47 床に増えたことで、ケアプラザと役割が重複するようなところがあって、数字を見ると新病床ができた令和 3 年度を契機にケアプラザの赤字が増えていっているのは、ケアプラザと地域包括ケア病床の役割が似ているという影響もあると考えると、ケアプラザだけを単体で見るのではなくて、ケアプラザと病院を全体として見た中で、地域の医療介護ということを考えていく必要がある。病院とセットにした中での全体の機能を考えていただく必要があると思う。市長のお考えはいかがか。

答：市長

- ・地域包括ケア病床ができたこととケアプラザの影響については、ご指摘を踏まえた部分につ

いて改めて分析していきたい。病院長も含めて、市立病院とケアプラザの連携というのは大切だという認識を持っている。ケアプラザの見直しを考えていくが、市立病院との関係も含めて、最終的にどういう方向にしていくのか議論できればと考えている。

質：見附新聞

- ・今年度と来年度は一般会計からの繰入れの考え方は、基本的には変わらないのか。

答：市長

- ・はっきりとは言えないが、現段階ではその方向で考えている。特段な事情があって、それができなくて運営ができなくなっているのかというのは別問題であるので、状況次第だが原則的には現状維持だと考えている。

質：見附新聞

- ・収益施設の指定管理の関係で、初日の課長答弁で、話がまとまったとか、まとまらなかったというフレーズが何回か出てきたように記憶している。話がまとまったということになると相手がいるわけなので、そのとき話がまとまったという相手は現時点の指定管理者と話がまとまった、まとまらなかったという理解でいいか。

答：市長

- ・必ずしも話をまとめる必要はない。ある程度意見交換をしたということ。

質：見附新聞

- ・見附方式から収入歩合方式の変更のときに、パティオに関しては集客増ということで、大型遊具の件がセットのような形で見受けるわけだが、メグカフェに関してはテイクアウトのコーナーの関係資料を見ると、メグカフェは明確に令和 8 年度中にテイクアウトコーナーの改修を実施というのが、うたっている。いわゆる全く真っさらで、手を挙げようという方があったときにそういう情報はこの中に入っているわけだが、パティオの資料を見ると、大型遊具を設置する場所は、管理の地域じゃない。この中には、大型遊具は入っていない。

答：市長

- ・私はそれがちゃんと伝わっているものと思っている。資料の中にどう書かれているかわからないが。

質：見附新聞

- ・資料を見ると大型遊具を設置するところは防災公園の方になるので、私が見る分には見当たらなかった。

答：市長

- ・議会に承認していただかないといけない部分があるし、契約書中でどう書いていたかわからないが、こういった記者会見をして、発表して、オープンになっている部分を考慮して、手を挙げていただいているものと理解している。

質：見附新聞

- ・見附方式から収入歩合方式への変更は、大事なポイントだと思う。今回パティオに関しては、マルイさんときらくさんが手を挙げられて指定管理となったが、意見交換をしながら、そういう情報をあらかじめ持っているところと、そういう情報がなくて、募集要項だけで手を挙げようとするところがあると、情報の格差というか、平等性、公平性みたいなところがどうなのか

と気になったため、まとまった、まとまらなかったというところが気になったので、いかがか。

答：市長

- ・まとまる、まとまらないの表現が適切かどうかはあるが、施設の継続性は大切なので、少なくとも現状の指定管理者との差をどのように考えるかとか、どういうふうに思われるかという傾向の確認は必要。そういう意見交換ができたという意味であって、完全にまとめる必要はないと思う。

質：見附新聞

- ・公募する段階は、これまでの指定管理者であろうが、新たに手を挙げるところであろうが、条件としては、イーブンであるべき。まとまる、まとまらないという表現は避けるべきなのかもしれないが、公募という形にできなくて、1年延長にしてという形になって、遅くても4月頃には今後の要件をまとめなきゃいけないと思うが、今回1年延長に至った最大の原因を改めて市長の口からお聞きしたい。

答：市長

- ・そういった意味でほっとぴあについては、指定管理の評価の中でも本久さんは非常に評価が高い。市民の皆さんにとっても、喜ばれていると認識している。最終的にまとめる必要はないが、ある程度方向性は確認していかなきゃならないし、話をしながら、別に最終的にまとまらなくても、うち（見附市）としても納得しなきゃならない、経営の面で。そういった中で、これなら今の本久さんか他かわからないが、やっていけるといったところが見出せなかった。そこをしっかりと詰めていくものと理解している。